



【投稿広場】 ★ 私がふと思うこと.....

佐々木美希(理学療法士)

私が理学療法士になった頃は、明治生まれの方にお会いする機会がありました。今は、さすがに明治生まれの方とお会いする機会はありませんが、「私は大正15年生まれなの～」なんて聞くと思わず「大正は15年で終わり、昭和64年に平成に代わり・・・」と頭の中で何才だろう？と計算してしまいます。入居者様の中には90歳を超える方もいらっしゃいます。皆さま年齢よりもずっと若く見え、思わず顔を近づけて綺麗な肌に見惚れてしまいます。10代や20代で戦争を経験し、その後の復興、高度経済成長期には一生懸命仕事をされ、不景気の時代が来て・・・私の想像をこえる時代の変化の中で生きてこられた方々には、ただただ尊敬の気持ちでいっぱいになります。私はリハビリを通し、皆さまの手に触れ、足に触れ、皆さまがどんな人生を送られてきたのかと想像します。変形した指や曲がった腰は畑仕事を一生懸命した証であり、穏やかな表情の裏には子育てや仕事、家庭の苦勞も色々あったらと思うと、きめ細やかな肌はどんなお手入れをしてきたのかな？などなど・・・そんなことを思いながら、これからもリハビリを通して入居者様のお手伝いをさせていただきたいと思っています。

★明けましておめでとうございます。

良いお天気に恵まれた元旦でした。おせち、「ドジョウすくい」、「おてもやん」と賑やかに過ごしました。さてアミュー展までいよいよ2か月です。まだ、たくさんの準備作業が残っています。プロジェクトに参加していただける方を募集します。内容はひまわりの補修、写真整理・印刷・連絡その他です。

★アミュー展に向けて、子供たちも頑張っています！

学童・たいよう学園の子供も最後の仕上げを頑張っています。今年は「ゴッホの世界」が共通テーマです。「星月夜」に「ひまわり」と子供達なりのやり方で頑張っているようです。



三つ編みでお星様を作る低学年の女の子



ひまわりの拡大図を描く高学年女子



端をピアノに張り付けて三つ編みをする子

★子供達の餅つき大会(12/27・たいよう学園)に行ってきました！



・お手伝いをしてくれました。子ども達が撮った写真です。



昔取った杵柄！力強く！カメラワークが素晴らしい！



おみやげのジュースに喜ぶ子供も高齢者も笑顔が一番

★子供たちが花壇作りを！



寒いので室内で準備パンジーを移し替える

◆花を植える子供達をじっと見ていたIさんのひと言。「わたし達もこんな風に育って来たのよね」と呟くと、隣のSさんがしみじみと「そうよね～」と言葉を返す。特養ホーム・きみどりの歳瀬。【子供叱るな、来た道じゃ 年寄り笑うな 行く道じゃ】 そんなことわざが浮かんで来たひと時でした。

◆きみどりでは「ヒヤリハット」ならぬ「にやりハット」を開始しました。入居者さんの何気ない言葉・会話の中に大事なことが隠されている時があり、心に沁みる寸言が散りばめられている時があります。感度を高く！楽しく、気楽におしゃべりを！「きみどり語録」が出来れば嬉しいですね。

【投稿広場】 ★ 認知症への「好意的理解」とは？

吉沢清美(筆名)

Aさん、手紙の続きです。先日の手紙の中で「好意的理解」という言葉を使いました。必ずしも、正解とは思いませんが、所謂「認知症」(の方の)私なりの“好意的に理解する方法”を記します。ひとつは周辺症状についての専門用語を出来るだけ使わないことです。いくつか事例を記します。

帰宅願望⇒誰でも施設より在宅が良く、帰りたいのに様々理由でそれができない。その心の中の葛藤が表に出てくるとあたかも「帰宅願望」が問題ある心象現象であるかのように私達自身が錯覚してしまいがちです。**感情失禁**⇒ご本人の胸に込み上げてくるものの深さにかかわらず、介護者の感じている場にそぐわない表出として、抑え難く言葉にならないその想念を分かろうとせず、理解の道を閉ざしてしまいます。例えば、「歳を重ねると涙もろくなる」。これを感情失禁し易くなるのでしょうか。老いは人生や命のはかなさを言葉でなく、身体で感じ取らせます。若く健康な人には中々理解で来ないと思います。**不穏**⇒不安や興奮を安易に不穏と言い換えてしまう。不安は時間や関わり方、環境により和らぐ時がありますが、不穏は激しい体動を伴い危機・危険をはらむものです。即、医療の手を借りねばなりません。介護ケアによってどうなる状態ではありません。**弄便**⇒便が手についた不快感から逃れる方法が分からなく困っているのです。決して弄んでいるわけではありません。**幻覚**⇒褪めた目で見ないでほしい。怖い夢を見た時の子供の頃を思い出してみしてほしい。どんな気持ちだったか。徘徊、然り。

私達はマニュアル化された「周辺症状への対処方法」ではなく、認知症故に日常的に心の底から湧き出てくる不安や戸惑いの、聞こえざる声に耳を傾けるという立脚点に立つことが大事ではないでしょうか？それがきみどりの年間テーマ《寄り添う》ということであり、社訓でいう《温かい心をもつこと》なのだと思います。一般に「この方は認知症だから・・・」ということによって、予め困っている方からと自らの間に壁を作りがちです。私達のケアは認知症の精神症状のベースにある“不安”を解消させられなくとも、もしかしたら忘れさせることが出来るかも知れません。時折、瞬時見せて頂く、笑顔や穏やかな表情がその証です。出来るだけ《普通の言葉》で分かろうとするのが肝要です。専門用語の使用には落とし穴がありそうです。専門用語を知れば、使用したいし、使用した時、分かったような気がしてしまいます。その結果、私たちは「何故？」という姿勢を取らなくなってしまいがちです。

Aさん。口説くなりました。専門用語を自由に操る経験者の方から見れば、笑いものでしょう。でも、認知症の方にとっても、私達にとっても、たとえ困難の中でも“希望”を捨てない仕事のあり方の一つが専門用語の使い方を再考する事なのです。如何でしょうか？次回、もう少しお付き合いください。



立版古・大波超える宝船



ドジョウすくい



おてもやん



皆様のお正月は？